【書評】

邵丹著『翻訳を産む文学、文学を産む翻訳
藤本和子、村上春樹、SF 小説家と複数の訳者たち』

阿部　翔太
（広島大学大学院文学研究科 博士課程後期）

本書は、「翻訳の文体（テクスト）の影響」をめぐる研究から視野を広げ、「翻訳書が生産された時代の文脈や背景、翻訳作業が行われた環境」、具体的には「村上春樹を育てた七〇年代の翻訳文化」の実態を問うことによって、本書の題辞が明示しているように、「翻訳」が新たな文学や文化を産み出す力学を、実地調査やインタビューといった実証的なアプローチによって明らかにするものである。博士論文をもとにした本書は、著者にとって初の単著である。

村上春樹『ノルウェイの森』(1987 年）の英語版を読んだことをきっかけに「ハルキ・ワールド」に魅入られたという著者の当初の関心は、「村上が翻訳したＦ・スコット・フィッツジェラルドとレイモンド・カーヴァーの比較を通してその翻訳が村上の創作にどのように結びついているのか」、「作家の創作に翻訳が働きかける創造性（creativity）の問題」にあったという。しかし、その関心はやがて「村上春樹を作った翻訳文化とは何か」という問題意識へと移行していく（「あとがき」より)。その問題を解明するために著者は、1970 年代に日本で本格的に翻訳・紹介され始め、村上春樹や高橋源一郎ら戦後生まれの新たな作家たちに「既成の文脈を離れて小説を書くとはどういうことかを示し、自己表現を試みる上での大いなる啓示」となった二人のアメリカ人作家――リチャード・ブローティガンとカート・ヴォネガットを俎上に載せる。そして、本書における著者の主眼は、これら二人のアメリカ文学者に親しむ村上にではなく、あくまで 70 年代を中心とする日本の若者文化や翻訳文化（そして、その文化を築き上げてきた翻訳者たち）という、より巨視的な文脈に置かれることとなる。それゆえに、本書は村上春樹という一人の作家研究の枠組みを越え、広く日本の翻訳文化・文学をめぐる問題へと開かれたものとなり、翻訳文学研究に一石を投じる挑戦的な一冊ともなっている。

本書は、「序章」、「第一章　七〇年代の翻訳を検討するための理論的枠組み」、「第二章　七〇年代の翻訳が置かれた歴史的文脈」、「第三章　ケーススタディⅠ　ひとりの訳者、複数の作者――藤本和子の翻訳」、「第四章　ケーススタディⅡ　ひとりの作者、複数の訳者――日本語で構築されたカート・ヴォネガットの世界」、「終章」より構成されている。以下、各章を概観しながら、若干の所感を述べていきたい。

序章では、「「村上春樹を作った翻訳文化とは何か」、つまり「翻訳文学に培われた新しい感性」を持つと言われる村上春樹を育てた文化的土壌とはいったい何だったのか。」(34-35 頁）という本書に通底する問題意識を提示した上で、今日の「翻訳文学研究には読者層をめぐる具体的な議

論はまだ少ないと言わざるをえないだろう。」（40 頁）と問題提起され、「特権的な読者というアイデンティティを持つ翻訳者もしくは翻訳者集団」、すなわちリチャード・ブローティガン作品の翻訳を数多く手がけた藤本和子や、カート・ヴォネガット作品の翻訳を手がけた数多の若い翻訳者たちに注目することの意義が述べられる。また、本書においては「翻訳書の時代的文脈（コンテクスト）」を検討するという著者の姿勢が高らかに宣言される。

第一章および第二章は、序章で示した問題に対して「翻訳者を中心に据えた二つの事例研究（ケーススタディ）をもって答えを模索」する上での理論的な枠組みを確認するとともに、1970 年代の日本の社会状況を概観するものである。第一章では、翻訳研究や世界文学研究の動向が丁寧に整理され、「翻訳という行為は、地域性や文化的伝統からの規制を受けると同時に、個人の成功や出版社の意向にも大きく左右されるため、ケーススタディ（事例研究）が必要不可欠」（60-61 頁）であると説かれる。続く第二章では、「ブローティガンやヴォネガットの作品群にいち早く反応したのは、やはり村上春樹や高橋源一郎のような、当時の若い読者だった」点に注目し、社会学者の見田宗介が『現代日本の感覚と思想』（1995 年）で描いた戦後半世紀の見取り図を参照しながら、60 年代から 70 年代における「若者」たちの姿を記述する。この点については、先行する研究を素朴にまとめることに終始したり、当時の若者たちの姿を画一的なイメージに閉じ込めてしまったりするきらいがあり、例えば「若者の誕生に一役買ったのは、六〇年代前半にデビューするとたちまち爆発的な人気を博したビートルズだった。」と述べ、「ビートルズに鼓舞された若者たちは無批判に社会通念に従うのをやめ、精神の独立に対する強烈な執着を示し始める。」との見解が示された箇所（98-99 頁）では、同時代のビートルズ受容の実像が精査されていない点が惜しまれた。この章でよりみるべきものは、章の後半部で論じられる「書物の消費者という若者のもう一つのアイデンティティ」の問題であろう。70 年代に「近代読者から現代読者への転移」というパラダイムシフトが生じ、「主体的な消費者というアイデンティティを優先させる若い読者」が登場した点に注目した著者の慧眼は、第三章と第四章で展開されるケーススタディの分析を読み進めることを通して、より明瞭になる。

第三章では、リチャード・ブローティガンの翻訳家である藤本和子が事例として取り上げられる。当時の文学翻訳において主流であった「内容重視の流行的な翻訳規範（trendy norms）に対抗しうる、原作に潜む作者の「声」に耳を傾けた形式重視の革新的な翻訳規範（progressive norms）」（139 頁）を藤本がいかに創出したのか、そして「藤本がなし遂げた芸術的（アーティスティック）な翻訳とは何か」という問いがここでは追究されていく。著者は、藤本の 60 年代における小劇場運動への参加や女性・黒人・ユダヤ人差別への関心、森崎和江と石牟礼道子への心酔、黒人女性文学の翻訳など、「藤本和子」というひとりの翻訳者の来歴をつぶさに洗い出し、藤本が「日本社会で重層化する女性差別の構造を解体するために」翻訳した中国系アメリカ女性作家マキシーン・ホン・キングストン『チャイナタウンの女武士』から「知らせるという意味の「報」に基づく回想記という形式」を、そして森崎や石牟礼から「聞書」という方法を学び「芸術的な翻訳」を実現していたことが論じられる。さらに、著者は藤本によるブローティガン『アメリカの鱒釣り』の翻訳に注目し、藤本は『アメリカの鱒釣り』の翻訳において「「テクストにひそむユーモア、声、リズ

ム」に耳を傾ける形式重視の革新的（progressive）翻訳規範を創出」し、それがその後の「翻訳文学に新風を吹き込んだ」と結論づける。

第四章では、カート・ヴォネガットの翻訳に携わった複数の翻訳者たちの翻訳に注目し、ヴォネガット作品の翻訳が、日本文学史における SF ジャンルの黎明期にどのように関与し、その地位向上にどう貢献したのかが論じられる。ヴォネガットの来歴やその作品の特徴を詳述する前半部からは、村上春樹がヴォネガットから多大な影響を受けていたことを改めて確認させられた。また本章の後半部では、60 年代からのヴォネガット文学の翻訳受容の経緯を辿り、伊藤典夫や浅倉久志といった SF 専業翻訳者の活躍に注目しながら、「日本で SF が豊かな文芸ジャンルとして成長していくにつれ、ヴォネガット作品群もまた、次第に日本の文学空間に取り込まれていった」様相を明らかにしている。

そして終章では、各章を振り返り全体をまとめるとともに、藤本和子の先駆的な仕事やヴォネガットの翻訳による「SF の文学的地位向上」が、「差別的構造を内包する日本の翻訳文学」や、「戦後日本の社会的秩序」に対する「脱構築」（デリダ）として捉えられていく。70 年代における「翻訳」という行為が、対抗文化（カウンターカルチャー）やそれを支える若者たちと分かち難い関係にあると捉える著者ならではの刺激的な意見が提示され本書は閉じられる。

「翻訳」というテーマをきわめて巨視的な視点から捉える本書において著者は、70 年代の日本の翻訳文化の分析を中心に、同時代の社会状況という横軸に目を配りながら論を進めていくとともに、60 年代の小劇場運動や、80 年代以降に隆盛した黒人女性文学の翻訳の波、藤本和子やリチャード・ブローティガン、カート・ヴォネガットら取り上げた人物たちの生涯について丹念な解説を付すなど、時代の縦軸への目配りも決して忘れない。「翻訳」をめぐる日本の文化状況を、まさしく縦横無尽に駆けめぐる本書は、優れた翻訳文学論であるとともに、優れた日本文化論でもある。

このように、本書が多くの驚きと発見に満ちた好著であることは疑い得ないが、一方で、いくつか気になった点もあったので述べておきたい。例えば、著者自身も終章において、「七〇年代のアメリカ文学の翻訳が果たして中心的な地位を獲得したかどうかは、当時の翻訳文学の全体的状況を検証しなければならない」（441 頁）と述べているように、「アメリカ文学」の翻訳に終始した本書の分析のみをもって、1970 年代の日本における翻訳文化・文学の全体像を描き出すことは困難であろう。著者は本書の根本において「村上春樹を作った翻訳文化とは何か」という問いを設定していたが、村上春樹が本書で取り上げられたブローティガンやヴォネガット以外のアメリカ文学や、あるいはアメリカ文学以外の海外文学からも多大な影響を受けていることは周知の事実であり、やはりアメリカ文学の翻訳だけに目を向けるのでは不十分である。こうした点については、例えば第四章において紹介されていた、雑誌『SF マガジン』が「当時アメリカやイギリスでさえ紹介が遅れていた雪解け以降のソ連や東欧の SF の翻訳受容に力を入れていた」（402 頁）という事例などが、今後の注目ポイントになるだろう。

また、これは評者が村上春樹を専門としているがゆえであろうか、村上春樹を「翻訳」というテーマから論じるにあたって、辛島デイヴィッド『Haruki Murakami を読んでいるときに我々が読

んでいる者たち』（みすず書房、2018 年）について全く言及がなかったことが気になった。著者は「村上文学研究には「翻訳」の視点が欠如している」（40 頁）と述べているが、私見では、辛島氏の著書もまた、著者の著書と並び「翻訳」という視点から村上研究の発展に大きく寄与するものであるし、著者の研究とも接続されていくものであると考えている。辛島氏の著書は、とりわけ 1990 年代以降、村上文学が世界的に受容されるに至った背景に作家（村上春樹）・翻訳家・編集者（出版社）が三位一体となった綿密なマーケティング戦略によるアメリカでの成功があったことを、当事者たちへのインタビューを軸に炙り出すものであり、確かに「村上春樹前史」である 1970 年代に焦点を当てた著者の議論とは直接的には重ならないかもしれない。しかし、1970 年代に本格化したリチャード・ブローティガンとカート・ヴォネガット作品の翻訳とそれをめぐる文化状況が、巡りめぐって日本文学に「村上春樹」という新たな文学を産んだという著者の卓見に接し、その後、そうした経緯で産まれた村上文学が、90 年代以降になると逆にアメリカで翻訳され成功を収めていったということを思うにつれ、では村上文学の翻訳は果たしていかなる文学を産む翻訳でありえたのか。あるいは、今日、世界的に受容されている「Haruki Murakami を作った翻訳文化」とは果たしていかなるものであったのか。そしてそれは、著者が明らかにした 1970 年代の翻訳文化・文学にどう接続され、連続しているものなのか。90 年代以降の村上文学のアメリカでの翻訳をめぐる問題から逆照射することで、新たに見えてくるものがあるようにも思われるのである。

無論、こうした「疑問」は、いずれも著者が切り拓いた研究の「可能性」と読み替えられるものであるし、それはまた、著者が私たちに示してくれた宿題として受け止めたい。本書を通して、村上春樹研究のみならず、広く翻訳文学研究の新たな地平が開かれたと感じる読者は、決して評者だけではないだろう。

さて、最後になるが、本書が 2022 年の第 44 回「サントリー学芸賞」（芸術・文学部門）を受賞したことも、ここで忘れずに述べておきたい。